『できることから始めた 私の農業経営&地域参画』

岩手県農業農村指導士 二戸市釜沢 佐藤 美恵子

【経歴】

盛岡農業高校卒業と同時に就農。

昭和 50 年に釜沢生活改善グループに加入。以降、二戸市アグリ生活研究会事務局長、岩手県生活研究グループ連絡協議会理事、カシオペア生活研究連絡協議会会長、二戸市農業委員を歴任。

現在、産地直売所「もぎたて市」会長、二戸市アグリ生活研究会事務局長を務める。

平成 16 年に長男が就農し、平成 20 年 11 月に家族経営協定を再締結した。

平成 16 年に岩手県農業農村指導士に認定。

【経営規模】

りんご 220a、きゅうり 30a、水田 120a（うち借地 55a、転作さくらんぼ 5a、ブルーベリー 5a）、育苗ハウス 2 棟

【家族構成】 本人、夫、長男、母

<25歳で経営の主体に>

- 20 歳で結婚。
- 第二子の出産を前に、親から必要な都度お金をもらう暮らしではなく、「自分達の裁量で計画的に使えるお金が欲しい」と思い、「きゅうり栽培」に取り組む。
- 父の闘病生活。25歳と27歳で経営を任された責任と不安。
- 2人で勉強し「りんご+きゅうり」の複合経営へ。

<農業と生活の基礎は4HCや生活研究グループで学ぶ>

- 家族の顔色を伺いながら出かけた。「よし、自分も頑張ろう！」と元気に。
→即、生産と生活に活かせる情報。このネットワークが、後の産直立ち上げで役立つ。
- 生活研究グループで取り組む「食育」活動。わかりやすく伝えるために寸劇。
- 寸劇テーマは、家族経営協定や起業活動・グリーンツーリズムと、台本作りから取り組む。
→笑いの中から相手に伝わる。→「夢みたいなシナリオ」がいつの間にか実践。

<経営参画と家族経営協定書>

○最初は農業者年金加入目的、再締結では経営の充実を目指し

- 平成 13 年に夫婦協定を締結（目的が農業者年金加入）
→老後の小遣いの目処が立ち、やる気倍増♪。
- 経営を良くするために、旧舌崎農協青色申告会有志 10 名で簿記研修開始。
- 平成 20 年に夫婦・後継者で協定を再締結。
長男の思いを文章に。長男が農協職員を辞め、農業という職業を選択したことへの責任。
長男の能力を発揮する場面を協定に入れる。→ルール敷きは経営主夫婦の責任。

○「単年度実行計画書」でやるべき事が見えてきた

- 協定書の目標には「果樹と野菜を主体とする安定経営」「消費者へ生産情報を伝えながら・・・」
「家族の助け合いで健康・・・」
- 具体的に何をどうしたら良いか分からない。→「単年度実行計画書」の作成。
- 所得目標やりんご、きゅうりの金額が即答出来ない（特に私と長男）。
→「だったら、今年は収入と経費を品目毎に把握しよう」
「贈答用のりんごは〇kg 箱を〇箱にしよう♪」「きゅうりは反収〇〇kg を目指そう♪」
等々、具体的になるほど家族の声が出る。
- 「佐藤農園家族協定書」。→長男の決意表明に感動！
- 突然、経営主（夫）が倒れ
→翌年の実行計画書では、夫の作業を減らし、「研修生への作業指示」を盛り込む。
- 目標と反省を、文字と数値で確認しながら話し合い→長男も経営へのアイデア提案も。

<農業委員としての活動>

- 51 歳で旧二戸市の議会推薦を受け農業委員として 6 年 8 ヶ月間活動。
- 就業条件整備の手法として、「家族経営協定」を推進。

<今後>

- 一昨年、就農を希望する女性研修生を受け入れ。→昨年春、新規就農者としてスタート。
- 地元小中学校の農業体験の受け入れ。→農業農村の応援者を創ろう。
- かつて両親がしていた「豆腐作り」を夫婦で再現したい。
→「味噌」「豆腐」を産直で販売したい。単年度実行計画への記載を始めた。